



上流から下流まで、本流から支流まで、 四万十川がつながる『すみずみの旅』

清流通信読者の皆様、こんにちは。

今回は、四万十川流域のグリーン・ツーリズムに取り組む方々の組織『四万十川すみずみツーリズム連絡会』についてお伝えします。



新しい旅のカたち『グリーン・ツーリズム』

グリーン・ツーリズム green tourism とは、農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動のことだ。

これは、長期バカンスを楽しむことの多いヨーロッパの国々で普及した旅のスタイルで、近年、日本でも“新しい旅のカたち”として注目されている。

この“ツーリズム”は従来の駆け足の“観光旅行”とは違い、一つの場所に長く滞在し、様々な田舎暮らしを体験したり その自然や住む人々と触れ合うことができる。だから、手に入れる感動もより大きく、より深いものとなるのがその魅力といえるようだ。

日本でのグリーン・ツーリズムは、1992 年に農林水産省が「新しい食料・農業・農村政策の方向」において、グリーン・ツーリズムを“農村地域政策の一環”として位置付けたことに始まる。

四万十川流域でもここ 10 年ほどで、グリーン・ツーリズムのお宿や体験型施設、農家レストランなどが増えてきた。

そして 2006 年には、四万十川流域で グリーン・ツーリズムに取り組む人々の ネットワーク形成 や 情報の交換などを目的とした組織、『四万十川グリーンツーリズム連絡会』（現：四万十川すみずみツーリズム連絡会）が発足。現在 37 施設が加盟し、活動の拡大や発展、課題の解決に取り組みつづける。今回は、彼らのその活動について紹介したい。

梶原町“いちょうの樹”

四万十川の最上流域梶原町は、町面積の 9 割を森林が占める人口 3800 人ほどの山あいの小さな町だ。

この梶原町に、2000 年 4 月、高知県で初めて誕生した 農家民宿『いちょうの樹』がある。

この宿を経営する上田知子さんは、“農林漁家民宿おかあさん100選”にも選ばれている、名実共に高知県のグリーン・ツーリズムの草分け的存在である。ここは、エリアでも大人気の民宿で、オン・シーズンには“早くからの予約で既に満室”ということも多いらしい。現在は娘さんと共に、もう一つの施設、農家レストラン『くさぶき』も経営する。しかし、ここに至る道は決して平坦ではなかったという。

農家である上田さんは、1990 年代以降の輸入農産物拡大により、梶原の主力作目の小ナスやぜんまいなどの価格が大きく下落する中、今後の活路を模索し続けていた。そして、以前より関心のあった農家民宿を始めようと思いつく。

しかし当時、高知県内には農家民宿はどこにもなく、行政からの支援態勢も整ってはいなかった。

「開業するには、何をどうすればよいのか、どこから手を付け準備するのか、皆目わからなかったのです。」

けれども上田さんの熱意が人を動かし、県普及員の支援などを得、資料情報を集め、そして3年がかりでやっと開業に漕ぎつけた。

こうして上田さんが切り開いた道は、その後、大きな動きとなって県下に広がっていく。

2002 年には梶原町で、上田さんが中心となり、『田舎をもたない人のふるさとになりたい』と始まった住民主体の組織 “グリーンツーリズム ゆすはら”が誕生し、町内にも、農家民宿・体験民宿が次々と開業していった。

「四万十川流域は広いので、地域ごとや流域全体でのネットワーク強化が望めます。ここに来られた観光客がトータルでこの地を楽しめるように、山から川へ下り海にたどり着けるように、お互いの連携を取って観光案内や宿の紹介がしあえるようにするべきではないかと思うのです。」ここに来られた全ての人に、あるもの全てを堪能して帰って欲しいと思うのだ。

四万十町大正中津川地区と“はこば”

その『いちょうの樹』開業から遅れること4ヶ月、2000年8月に四万十町大正中津川に農家民宿『はこば』がオープンする。

ここの女将の田辺客子さんも“農林漁家民宿おかあさん100選”に選ばれていて、お料理自慢の、リピーター客の非常に多い、大変な人気の宿である。

大正中津川は、広い四万十町の間差点、大正地区の中心から梶原川沿いを北上し、その支流中津川沿いをさらに進んでいく。いくつかあった民家が途切れたところ、森の道はやがて小さなトンネルへと入っていく。その先には桜並木が続いていて、そして暫く走れば、目の前にはまさに現代の“桃源郷”、中津川集落が広がっている。

中津川集落は藩政時代から土佐藩のお留め山として良材を産してきた地域で、林業が盛んな頃には人口300人を越えた集落だ。現在の人口はその1/3ほどだが、小さな集落は閉鎖された“桃源郷”ではなく、外との交流が非常に盛んな“オープンな集落”だ。

地域ぐるみで取り組むイベントも数多く、移住者も積極的に受け入れている土地柄故に、ここには1ターンで移り住む人も多い。

「子育ての大仕事が一段落しまして、私たち夫婦の夢であった農家民宿をすることにしました。はじめはこんなにたくさんの方々に来ていただけるものとは想像もしていなかったのですが、今は毎年毎年訪れて下さるリピーターの方々も増えて、集落ぐるみでお客さんをお迎えしているようなところがあります。ここには、山猟や川の漁、野菜づくり、コンニャク・味噌・漬物・お寿司づくりなどの知恵や技術を持った名人がいます。そういう地域の人々との出会いも大きな魅力だと思いますよ。たくさんの方との出会いを楽しみに、囲炉裏端で田舎の暮らしや山のことをお話出来ればと思っています。」

四万十市西土佐地区の場合

日本に於けるグリーン・ツーリズムは、都市と農村の距離が比較的近いことや、欧米との休暇形態の違い等から、日帰りから短期滞在型も含め“日本型グリーン・ツーリズム”ととらえられているようだ。だから、農家レストランや農産物の直販所などもそれには含まれている。

愛媛県との県境にある四万十市西土佐地区。2005年4月に、旧西土佐村と旧中村市が合併して“四万十市”が誕生したのだが、ここはその旧西土佐村エリアだ。

2007年5月、西土佐江川崎にオープンした“小さな問屋”『山間屋(さんかんや)』。

「生まれ育った西土佐のおいしいもの、ステキなものを、全国に発信する山間屋になりたい!」という想いで、代表の中脇裕美さんはここを立ち上げた。

今ではこの『山間屋』、問屋としてだけでなく、地元の野菜や果物を使った評判のケーキ屋さん『ストローベイル・山間屋』の経営をはじめ、西土佐エリアのグリーン・ツーリズム情報発信の機能をも持つ。

また、西土佐エリアには、この他にも個性なお宿や体験施設、農家レストランなどが多く、四万十川下流域のグリーン・ツーリズムの拠点となっている。

2005年4月に西土佐に開業した、いろりの宿民宿『こんびら』の井上茂子さんは、グリーン・ツーリズムについてこう語ってくれた。

「民宿をし始めて、西土佐のすばらしさを再認識しています。泊まられる都市部の方々から、自分たちが見慣れて見失っていた“地元の良さ”について、あらためて気付かされることが多いのです。そして来られた方々は、ここでいろいろな発見をして帰って行かれるようですね。グリーン・ツーリズムは、まさに都市と田舎の“対等な交流”だと思います。こんなところが、民宿をしていく上で、大きな魅力になっていると感じています。」



いちょうの樹(梶原町)



せいらの里(津野町)



はこばのある中津川集落(四万十町)



こんびら(四万十市西土佐)



ストローベイル山間屋(西土佐江川崎)



こんな看板を見つけたら、その近くには、『すみずみ』のお宿や食堂があります。

上流から下流まで 本流から支流まで 四万十川がつながるすみずみの旅

四万十川すみずみツーリズムは、四万十川流域にある、
民宿・体験施設・食堂をつなぎながら、
なんでもない四万十の日常を観光資源ととらえる旅の提案です。
それは、支流の支流の小さな谷にある山間のくらしや知恵にふれながら、
その風景にとけ込むような旅です。
クネクネの細い道をほねをおりながらたどり着いた先に、
はじめてみるのに懐かしい、はじめてあうのに親しみのある、
あたたかい家と人が待っています。
ぜいたくなものは何一つありませんが、
自然の恵みと手づくりのものを一緒に食べながら、
ときにはお手伝いしてもらったりして、いろんな話をしましょう。
そして「また会う日までお元気で」と約束するようなツーリズムです。

こうして、四万十川流域に グリーン・ツーリズムの施設が増えてきた 2006 年 6 月には、行政の支援もあって、『四万十川グリーンツーリズム連絡会』が設立された。

この“連絡会”は、設立当初は行政主導で、年 2、3 回の情報交換の場に止まっていたが、設立から 3 年が経過した 2009 年 6 月には、会員の中から会長・副会長を選出しての“自主的な運営”に切り替わっていった。

その自主的活動が始まった翌年のこと、連絡会は『統一案内看板』を制作することになる。

それはこういう経緯だ。

四万十川流域にあるグリーン・ツーリズムの施設は、どれもこれも、かなり奥まったところにある。

そのアクセスの悪さは、今までの発想でなら「こんな不便なところに…」という“ネガティブ要素”として一方的にとらえられることが多かった。

事実、「宿に初めて宿泊する方は、暗くなってから到着する場合は、道に迷うことが多い。」

「街灯など無い、真っ暗な初めての道は誰でも怖いはず。なんとかならないものか…」

そういう会員の声が、連絡会では毎回のように聞かれていた。

しかし、これはどうしようもない“絶対的ネガティブ要素”なのだろうか、会員達は話し合った。

そんな時、ヨーロッパのグリーン・ツーリズム先進国、イタリアの“アグリ・ツーリズム”を視察した『はこば』の田辺莊市さんからのこんな発言に、皆はハッとさせられる。

「イタリアでは緑豊かな田園地帯に多くのグリーン・ツーリズムの宿がある。そしてどんな田舎に行っても、宿やレストランの統一された絵文字看板が道路脇に出ていて、この近くにそれらがあるということが、誰でもすぐにわかるようになっている。そういう看板を出すことで、お客さんの誘導も出来るし、訪れる人達に、宿のネットワークによる安心感も与えられるのではないか。」

アクセスの悪さを一方的な“ネガティブ要素”ととらえているばかりでは何も始まらない。

逆に、それを利点として活かそう。この要素を、『毛細血管のように張り巡らされた、四万十川の支流の支流のすみずみまでを巡る旅』という、“四万十川流域の旅の特徴の一つ”としてとらえ、ここに多くの方に来てもらえるようするためにはどうすればよいのかをみんなで話し合おう。

何度かのワークショップで“連絡会”の方向性を確認しながら、看板の制作は進んでいった。

そして、自分達が進むべき方向と、自分達自身が提案したい旅のスタイルが決まったとき、

『四万十川グリーンツーリズム連絡会』は、→『四万十川すみずみツーリズム連絡会』に、必然的に“名称変更”され、同時に連絡会のロゴも決まった。

生まれたばかりのこの連絡会は、まだまだ、解決すべきこと、運営に関する課題も多い。

しかし、『四万十川すみずみツーリズム連絡会』は、全員の知恵と力を結集して、流域の山と川と、そして海をつなぐ“四万十のスローな旅”を提案しながら、今、大きく伸びていこうとしている。

(取材／記事：矢野由美子)

